

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 柄鏡形（敷石）住居址研究をめぐる近年の動向について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国史学会 公開日: 2024-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 暉久, Yamamoto, Teruhisa メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000423">https://doi.org/10.57529/0002000423</a>

## 柄鏡形（敷石）住居址研究をめぐる近年の動向について

山本暉久

## I はじめに

縄文時代中期末葉から後期初頭期にかけて、関東・中部域を中心として、こつ然ともみられるありかたで、柄鏡形（敷石）住居が出現する。<sup>1)</sup> 柄鏡形（敷石）住居は、関東・中部域に長期間にわたって形成を続けてきた大規模な拠点的集落である環状集落が、突如として崩壊を遂げるという時期に出現をみるのである。いわば、中期から後期へと移る時代の転換点に、このような特異な形状・構造をもつ住居が出現し、短い軌跡ではあったが変遷を遂げながら、やがて終焉を迎え、二度とそのような形状・構造をもつ住居は構築されなくなるのである。なぜそのようなありかたを示すのか、その歴史的な背景や意味を説き明かさなければならぬ。

これまで、筆者は、柄鏡形（敷石）住居址をめぐる研究とその動向について、いくつかまとめてきた（山本一九九六b・一九九九・二〇〇二・二〇〇四・二〇一〇a・b・二〇一一など）。また、これまで柄鏡形（敷石）住居址に関して発表してきた論攷等においても適宜、関連する文献について言及してきた。

二〇一七年二月二五日に開かれた國學院大學国史学会二月例会『縄文時代の柄鏡形住居―研究課題の整理―』にお

いて、「柄鏡形（敷石）住居址研究をめぐって」と題して研究発表を行ったが、これは、これまで行ってきた筆者の研究の総括と今後の展望の概略を示したものであった。本稿では、それらを基礎において、近年の研究を対象として筆者なりの見解と展望を明らかにしてみたい。<sup>(2)</sup>

## Ⅱ 柄鏡形（敷石）住居の出現過程

この問題をめぐっては依然として論議が続いている。その焦点は、筆者が示した柄鏡形（敷石）住居成立のプロセス（山本一九七六）をめぐる評価の問題といえる。柄鏡形（敷石）住居の成立の様相を探るためには、時空的な検討に基づき、その変化の実態を明らかにさせることは必要不可欠の作業といえよう。

川島義一は、国史学会二月例会において「住居属性分析からみた柄鏡形住居出現期の様相」と題して発表を行ったが、その基礎となった論攷（川島二〇一七）が別に発表されている。本稿は、冒頭の「論文要旨」にあるように、「神奈川県港北ニュータウンの遺跡群を研究対象に、柄鏡形住居址の出現期の様相を分析することにより、その出現の背景を検討した」論攷で、「柄鏡形住居址を含む竪穴住居址の分類にあたって、研究者の主観によるバイアスをできるだけ排除するために、客観的で検証可能な多変量解析の多重対応分析とクラスター分析」を行ったものである。その結果、「柄鏡形住居址の出現前は、各住居址の遺構属性の組み合わせは非常に多様であり、「柄鏡形住居址は、それらの遺構属性を引継いで張出部と敷石・周礫を付加したものであり、張出部単一の要素をもって、同じ種類の遺構に一括りにすることはできないことを示」すとともに、「柄鏡形住居址が構築された場所に注目すると、まず遺跡内の住居址の集中地区や土坑墓群の近辺に出現し、その後外縁部にも展開している」こと、しかし、「出現期の柄鏡形住居址の

近辺には、これと類似する住居址は検出されず、むしろ周辺遺跡に類似度の高い住居址が見られることから、「柄鏡形住居址は、従来からの遺跡内の遺構配置パターンを継承し、空間構成を維持しつつ、地域の遺跡群全体に分散継承されていることを明らか」（一頁）にさせている。多変量解析による分析は、ユニークであるが、今後、有意な傾向を指摘するためにも、国史学会二月例会で発表したように、もつと多数、かつ広域に出現期の柄鏡形（敷石）住居址について検討・分析を加えることを期待しておきたい。

石井寛も柄鏡形（敷石）住居址についても精力的な研究を継続している。二〇一四年に発表された論攷（石井二〇一四）では、港北ニュータウン遺跡群の調査成果、とくに、「拠点・準拠点集落址」とされる神隠丸山、月出松、三の丸、二ノ丸、大熊仲町遺跡の縄文中期集落址を取り上げながら、中期後葉期から終末期・後期初頭期の住居址の構造変化に分析を加え、該地域のありかたに検討を加えている。その結果、加曾利EⅡ式以降、加曾利EⅢ式に至る間に、「集落の衰退へ向けた動向」がとらえられ、「住居址にあつても構造の弱体化という形で現れて」おり、「竪穴住居址構築にかける労力の軽減化と住居構造の簡素化を見て取ることができる」（二二頁）とされる。すなわち、「住居構築にかける労力節約の背景には、基本的に中期社会の衰退が関係」し、「建築材の供給にも問題が生じてい」た、「環境破壊」がその背景にあつた可能性に言及している（三七頁）。そうした傾向の中、加曾利EⅢ式期に「荏田遺跡群」と呼んでいる「それまで居住が不活発であつた地区、つまり居住域とされていなかった地区に、小規模集落址が増加する傾向が観察されるようにな」（二二頁）り、このことは「中期社会崩壊の象徴的出来事とも理解される」（二三頁）としている。さらに、拠点・準拠点集落址においても、たとえば二ノ丸遺跡のように、「加曾利EⅢ式新段階において初期柄鏡形住居址への転換が進展し、住居構造から入り口部方向に変化が生ずるなど、集落景観に変化がもたらされ」、「加曾利EⅣ式期には旧来の住居設定区域に拘泥しない住居址分布が現出し、環状集落を基本とした集落構造は崩壊

に至った」(二三頁)と、とらえている。このような動向は、港北ニュータウン遺跡群のみならず広く南西関東、中部域においても指摘が可能であろう。

本橋恵美子もまた、筆者と同様、これまで一貫して柄鏡形(敷石)住居址の研究を継続してきた。今回の国史学会二月例会においても、「縄文時代の柄鏡形住居の再検討」と題する研究発表を行い持論を展開している。ここでは、発表の基礎となった論攷(本橋二〇一七)について触れてみる。本橋のこれまでの柄鏡形(敷石)住居址に関する研究は一貫しており、とくに新たな見解を出しているわけではない。二月の発表でも触れているように、その出現のありかたについては、筆者と大きく異なるものではないが、筆者が柄鏡形(敷石)住居址変遷過程の第一期に位置づけた中期後葉期の石柱・石壇をもつ住居址や小張出を有する住居址は、柄鏡形(敷石)住居址の定義から除外しているのが大きな違いといえる。筆者からすると系譜を辿れるとするなら、柄鏡形(敷石)住居址の原初的段階として位置づけるべきかとは思うが、それは解釈の違いと理解しておこう。

それはそれとして、本橋は、「柄鏡形住居」を「加曾利E4式土器分布の範囲に存在する住居形態」(二三頁)とする従来からの見解(本橋一九八八)をもとに、あらためて、中部地方、北関東、南関東地域での「中期後葉の住居址と遺跡の検討」(二二四―二二九頁)を行い、「出現期の柄鏡形住居」を「出現期 加曾利E3新式期」「定着期 加曾利E4古式期」「拡大期 加曾利E4新式」称名寺式期」の三期に分けて検討を加えている。その結果、小張出部をもつ住居である「潮見台型と柄鏡形住居が出現する地域とは重ならない」ことから「潮見台型と柄鏡形住居は別の系統であり」、「山本の柄鏡形(敷石)住居址のI期に潮見台型を位置づけている点」が、柄鏡形住居研究において混乱を招いている」と批判し、「潮見台型の出現と柄鏡形住居の出現には空白期があり、分布地域についても重ならない」点を指摘したうえで、「柄鏡形住居は加曾利E3新式期に南関東で出現した住居形態であり、加曾利E4式期に一挙に中

部地方から東北地方南部まで広がったが、遺跡によつては受け入れない事例があり、後期の住居にみる多様化の傾向につながるものと」（二三二―二三三頁）評価している。

このように「潮見台型」（筆者のいう小張出をもつ住居）が中期終末期に柄鏡形住居へと転化したとする考え方に對して、本稿では否定的な見解を強調しているが、小張出にしばしば伴う埋甕の存在や、それに付属する対ピットの存在は、続く柄鏡形住居に受け継がれていることは否定できない。確かに、本橋が指摘しているように、南西関東から中部域においては、柄鏡形（敷石）住居は、「加曾利E3新式期に南関東で出現した」（二三三頁）可能性が強いが、張出部の成立と屋内敷石成立の検討は、柄鏡形（敷石）住居成立を探る車の両輪と考えなければならぬと思う。正しくは、「潮見台型の出現と柄鏡形住居の出現には空白期」（二三三頁）があるのではなく、ともに連動しながら、中期終末期、本橋のいう「加曾利E3新式期」に誕生したものと考える必要がある。その点は、筆者の一貫した考え方である。

柄鏡形（敷石）住居成立に影響を与えたと考えられる中期後葉段階の住居内敷石（配石を含む）の様相については、とくに奥壁部に構築されたいわゆる「石柱・石壇」施設について分析を詳しく試みたことがある（山本一九九四）が、この点について、最近、吉澤宏が、相模川流域を中心に、「立柱（石柱）と共伴する埋甕」事例について検討を加えている（吉澤二〇一七）。分析結果によると、「立柱（石柱）と埋甕が共伴する屋内施設の推移をみると加曾利EⅠ式併行期に初現がみられ、加曾利EⅡ式期を経て、加曾利EⅢ式期に盛行」すること、そしてこうした住居が「柄鏡形（敷石）住居跡の発生の問題にかかわり、張出部の基部および先端部から検出される埋設土器や石棒へと変化する軌跡が辿れるかは、今後に残された課題である」（一九七頁）としている。敷石にせよ、立柱（石柱）が出入口部埋甕とも深く関わり合いをもつことから、中期終末期に完成を遂げる柄鏡形（敷石）住居の前段階の様相を、吉澤のように今

後とも分析・検討していくことは重要と考える。

綿田弘実が、北信、千曲川下流域に位置する長野県中野市千田遺跡の中期集落のありかたについて考察を加えている（綿田二〇一七）。中野市千田遺跡8区からは、「外径約九〇mの環状集落跡南側半分を検出し」、「中期中葉の新道式期から末葉の加曾利EⅢ式期にわたる竪穴住居は五三軒を数え」、その内訳は、「竪穴のみを五軒を除き、中葉期が九軒、末葉期が三軒、その他三五軒前後が後葉期大木8b期並行期に属すと推定され」、「中期末葉期には8区に少数の敷石住居と配石遺構などが営まれたものの、生活拠点4・5区へ移動したと推定され」（二五八頁）ている。出土土器は複雑な様相を示し、その地理的位置から新潟県域に近似する。このうち、「Ⅶ群」と分類されているのが、中期末葉に相当し、「加曾利EⅢ式の新段階」（一六二頁）に位置づけられている。四〇号・二六号・七号住の三軒が相当し、四〇号と二六号住は部分的な敷石をもつもので、プランは明確ではないが、この時期に柄鏡形（敷石）住居が出現していた可能性が考えられる。その背景には「千曲川流域では加曾利EⅢ・Ⅳ式の進出が顕著であり、敷石住居が出現・展開し、新潟県とは土器様相でも住居・炉形態でも袂を分かť感がある」（二六六頁）と理解され、柄鏡形（敷石）住居の成立に加曾利E式系土器の進出と関係が強いことをうかがわせている。柄鏡形（敷石）住居の成立と波及は出土する土器の系統を視野に入れて論ずる必要があるのである。

### Ⅲ 柄鏡形（敷石）住居の拡散と展開

中期末〜後期初頭期に成立をみた柄鏡形（敷石）住居は、後期以降、分布域を拡大する。川島裕毅が、中期末〜晩期の住居形態・構造の変遷について、神奈川と千葉の事例から分析し、その東西差を検討した論攷（川島二〇一一）

及び、武蔵野地域と下総地域における柄鏡形住居の受容のありかたを論じた論攷(川島二〇二二)を発表している。この川島の論攷については、別に論評しているのでここでは触れない(山本二〇一六)。

また、雄山閣が刊行した『シリーズ 縄文集落の多様性』全四巻(鈴木克彦・鈴木保彦編二〇〇九・雄山閣編集部編一〇・鈴木編一二・一四)は、列島を地域ごとに分けて、そのテーマごとに、特性や変遷等を論じたもので、柄鏡形(敷石)住居址についても、各巻で触れているのが参考となる。

宇佐美哲也が、柄鏡形(敷石)住居址の出現のありかたについて触れている(宇佐美二〇二二)。宇佐美は、武蔵野台地に発見された中期集落址の変遷を分析し、その結果にもとづいて、「環状集落跡が終焉を迎えるとされる12b・12c期(「新地平編年」加曾利EⅢ式中・後半段階に相当:筆者註)から中期末葉の様相については、今回検討した一〇遺跡において、いずれも共通した様相を確認することができ」、それ以前の「住居分布とは、まったく違った原則のもと、それまでの居住痕跡が環状に累積してきたことを無視するかのような分布状況を示す。と同時に、環状集落跡として把握されている以外の場所において住居跡が検出される事例も急増する」(三〇六頁)としている。この傾向は南西関東における中期末葉期の柄鏡形(敷石)住居出現時期の特徴なのである。

また、福島雅儀が、自ら調査を行った福島県三春町柴原A遺跡と越田和遺跡の分析を通じて、阿武隈川流域における中期から後期への集落変容の様相について論じている(福島二〇二二)。旧稿(山本二〇二一)で取り上げた大河原勉の論攷(大河原二〇一〇)とあわせて、東北南部における敷石風習、柄鏡形(敷石)住居形態の受容の様相をとらえることができる。同様な視点は、阿部昭典によりすでに論じられている(阿部二〇〇〇)。

北関東の後期前葉の柄鏡形(敷石)住居址については、海老原郁雄らによって論じられている(海老原・永岡二〇一六)。栃木県さくら市(旧・氏家町)勝山遺跡から検出された柄鏡形敷石住居址を「勝山型柄鏡住居」(四四頁)と



命名し、「地域的な敷石住居」(五六頁)ととらえているが、こうしたタイプは柄鏡形敷石住居変遷の後半段階に現れることが多く、「勝山型柄鏡住は堀之内式期に関東一円に広まった張出部が肥大化した柄鏡住の範型と捉えられる」(五七頁)のであり、北関東的特性を指摘するのは当たらないだろう。

和田哲は、先に多摩地域の柄鏡形(敷石)住居址事例の分析を行った(和田二〇〇二)が、その続編がまとめられている(和田二〇一六)。前稿では二二五例を挙げているが、それを追補したものである。新たに一九一例が追補されており、事例数の増加に驚かされる。この地域の柄鏡形(敷石)住居址事例が一覧表として掲載されており、事例を知るうえで参考となるが、遺跡に関連する参考文献が省略されているのは前稿同様残念な点である。

柄鏡形(敷石)住居址の西日本の事例はきわめて少ないが、小島秀彰が福井県若狭町(旧三方郡三方町)北寺遺跡・ユリ遺跡発見住居址(中期末〜後期前葉)を「柄鏡形平地住居跡」(小島二〇一七)ととらえている。ただし、遺存状態は良好ではなく、確実に柄鏡形を呈するかは、判断に迷う。もし柄鏡形(敷石)住居址とすると、現段階、分布の西限となる。

次に柄鏡形(敷石)住居の終焉のありかたについてみてみよう。房総地域の後・晩期の住居址の特徴については、西村広経がまとめている(西村二〇一四・一五)のが目目される。柄鏡形(敷石)住居址変遷過程の後半段階の様相については、後期中葉期を境として、屋内敷石敷設の伝統が廃れていく傾向が指摘されるが、柄鏡形(敷石)住居変遷過程の後半段階、後期前葉以降は、張出部の形状にさまざまな変化が現れ、肥大化する傾向も指摘できる。とくに東京湾東岸の東部関東域では巨大住居の構築と相俟って、その特徴が顕著となるのである。この西村の論攷については、「核家屋論」や階層化社会論とも関わるが、別に取り上げて論評している(山本二〇一六)ので、それを参照願いたい。

筆者は、柄鏡形（敷石）住居の終焉のありかた、とくにその分布の中心地域の一つであった中部山地域を対象としてあらためて論じてみた（山本二〇一四）。この問題については、すでに新津健によって詳細に論じられており（新津一九九二）、その追認にとどまったにすぎないが、柄鏡形（敷石）住居の終焉の様相もまた、地域性をもちながら複雑な展開を示しており、今後とも研究の進展が期待されよう。

終末期の南西関東域を中心として、環礫方形配石や周堤礫を伴う特異な柄鏡形敷石住居が構築される。この点については、筆者なりの見解をすでに示している（山本一九九八・二〇〇二）が、こうした配石行為は、柄鏡形敷石住居構築当初からなされたものではなく、柄鏡形敷石住居廃絶に伴う儀礼行為として理解している。近年、新東名高速道路建設に伴う発掘調査が、かながわ考古学財団により実施され、多くの後期に属する柄鏡形敷石住居址が発見されており、環礫方形配石や周堤礫を伴う柄鏡形敷石住居址も類例が追加されつつある。柄鏡形敷石住居に付随するかのよう<sup>1</sup>に列状配石される事例も後述するが、上面に重なるように構築されている例があることから、同時構築されたものとは認識しない。また、伊勢原市下北原遺跡は大規模な配石遺構を伴う柄鏡形敷石住居址が多数検出された後期前葉<sup>2</sup>（中葉の集落址であるが、これまで盛土保存されてきた地区を対象とした再調査が行われ報告されている（佐々木他二〇一四））。再調査により、敷石下面の状況等について新たな所見も得られており、これまでの理解を若干修正する必要がある。

#### Ⅳ 石棒祭祀と柄鏡形（敷石）住居

近年、中期大形石棒をめぐる活発な議論がなされている。かつて、筆者は石棒祭祀の変遷を住居址内外から出土

する事例に着目して論じたことがある（山本一九七九）。また、柄鏡形敷石住居と石棒が密接に関わることにしても事例を集成しつつ検討を加えたことがある（山本一九九六a・二〇〇二・二〇〇六b）。その後、二〇一〇年一〇月に國學院大學で行われた大形石棒をめぐるシンポ（國學院大學考古学資料館研究室編二〇一〇）とそれをとりまとめた書（谷口編二〇一二）が刊行され、石棒研究があらためて脚光をあびることとなった。二〇一五年一二月には、大形石棒についての特集が考古学ジャーナルNo.六七八においてもなされている。

石棒をめぐる問題は多岐にわたっているが、ここでは、最近議論が活発に行われている東京都国立市緑川東遺跡第二七地点から発見された完形石棒四本が並置された「敷石遺構SV1」（和田他二〇一四）の評価をめぐる問題に焦点を当てて触れてみたい。この遺構をめぐるのは、多くの研究者が論議に加わっており、関連する文献も多数発表されている。俗に「緑川東問題」（五十嵐二〇一六）と称されているようであるが、問題は、SV1「敷石遺構」は以下略す）より検出された四本の完形石棒がいつ置かれたのかについての議論、すなわち、SV1が構築された時点に設置されたのか（五十嵐二〇一六・一七a・bなど）、そうではなく、廃絶時に敷石や炉跡を除去した後設置されたのか（黒尾二〇一四・二〇一六・二〇一七ほか）という対立と論争である。筆者は、発見時に清水周氏の連絡により現地で見学する機会を得たが、その時の印象は、完形大形石棒が四本並置されているという特異性はあるものの、柄鏡形敷石住居の廃絶に伴う廃屋儀礼という印象をいだいた。その後の調査と分析の結果、この遺構は炉址が検出されなかったため、柄鏡形敷石住居址ではなく、「敷石遺構」として取り扱われるようになっていく。二〇一七年二月に、この問題について、公開討論会（東京考古談話会編二〇一七a）が開催され、五十嵐と黒尾による対立点が浮き彫りにされ、その記録も、五月にまとめられている（東京考古談話会編二〇一七b）。

先に筆者の見解を示しておく。SV1は、柄鏡形敷石住居として構築され、集落で行われた石棒祭祀の終わりにあ

たつて、四本の石棒を柄鏡形敷石住居内に配置し、廃絶に伴いプラン壁際に配石行為が行われた廃屋儀礼を示すものと考えられる。なお、石棒が設置されていた部分はもとも敷石がなかったのか、除去したのかは不明であり、炉址は確認されていない。そもそも、石棒が樹立、横位に置かれたか、あるいはその状態が破損、破砕されたものか、完形であったのか、などといった個々の事例に違いはあるにせよ、中期末・後期初頭期には、柄鏡形(敷石)住居址内から出土するのが通例で、SV1のように完形四本は稀ではあるものの、そうした傾向から逸脱したものではないと考えられる。問題は、この柄鏡形敷石住居が構築され、どの程度の時間が経過したのちに、石棒が置かれたのかという点であるが、炉址の存在が明瞭でないことからすると、構築後あまり居住されないうちに、廃絶に至り、石棒を用いた廃屋儀礼が行われたのではないだろうか。調査者の清水周は、「本遺跡の敷石遺構が、祭祀儀礼を行うための施設で、何らかの理由で祭祀が行われなかった遺構であるのか。それとも、この並んだ状態のものが、祭祀を示すのか。また、これから祭祀儀礼に用いられる石棒用の祭壇的保管庫であったのかもしれない」(清水二〇二三、二頁)としているが、筆者はそうした特殊視する立場はとらない。ところで、報告者の一人である黒尾和久は、報告書(黒尾二〇一四)において、「確認当初は、竪穴構造の住居跡(SI1)と認識した。しかし完掘時において炉址が検出されず、また、床面上に大型石棒が並置されていたことから、遺構種別を住居から敷石遺構(SV1)に変更した」(二二頁)としたうえで、「石棒発見時、大きめの土器片や扁平な破損礫が石棒上に出土し」、「これらは置くというよりは無造作に投入された状況を呈しており、「四本の石棒を並置するにあたり既存の敷石を除去して浅い掘り込み設けた可能性を考慮する必要がある」(二八頁)としている。報告で「床下土坑D1」とした施設は、焼土・炭化物はなく炉址と理解されていないが、位置的にはこの場が炉址として構築された可能性もある。土器は、「体部に微隆起線による懸垂文を有する加曾利E系土器とともに」、「中津系系土器」「北白川C式4段階」(三八頁)が出土している。このことから、「石棒

の並置がSV1廃絶後、さほどの期間を経ない時期におこなわれた可能性が示唆される」(一三二頁)としている。筆者からすると、石棒の並置は、廃絶とほぼ同時と認識すべきと思う。

この問題に関連して長田友也も見解を明らかにしている(長田二〇一四a・b・c・二〇一七)。長田は、報告書中の考察(長田二〇一四b)において「敷石遺構SV1ならびに出土石棒からは、遺構内に石棒を並置した点のみが指摘される」ことから、「結論として本事例が直接的な石棒儀礼行為を示すものではなく、笠形石棒終焉へ向けた終焉行為・廃絶儀礼として」(一六四頁)評価している。筆者も、概ね長田の解釈と同様であり、本例は、長田が指摘しているとおり、「完形石棒が四本同時に出土した石棒儀礼の終焉を示す事例であるという点に尽きる」(三〇頁)のである。

五十嵐の考え方もそうなのだが、このような特殊な遺構の姿や遺物に触れると、遺構そのものを特殊視する傾向が強い。和田哲もその一人である(和田二〇一四a・b・二〇一五・二〇一六)。報告書においても、「敷石遺構SV1は通常の敷石住居に見られるように、単に縁石をめぐらすだけでなく、その上の壁面に全面的に礫を積み上げるため、縁石は一般的敷石住居より大き目の、最大長径五〇cmもある大礫を使用したものと考える」(一六九頁)として、奥壁部の積み石を構築当初からあったと認識している。また、関連する遺構として、東京都八王子市小田野遺跡から検出されたSI08・10(相川他二〇〇九)との対比を試みている。この重複する柄鏡形敷石住居址事例については、別に村田文夫や百瀬貴子らによっても特殊な遺構とする認識が示されている(村田二〇一一、百瀬二〇一二)が、別に触れている(山本二〇一〇a・b)ので詳細は略すが、筆者はそうした立場はとらない。また、和田哲は、八王子市北野遺跡発見の柄鏡形敷石住居址の張出部に並置された二本の石棒例との関連性についても触れ、石棒の下に敷石がないという共通性を指摘している(和田二〇一五)。

破碎・火入れといった、この時期の柄鏡形(敷石)住居出土の石棒事例に多くみられるような廃屋儀礼ではないが、

石棒の本来の用途の停止行為＝廃屋儀礼、が行われたという一つの姿を示していると理解される。破碎・被熱しては無くとも、柄鏡形（敷石）住居址からの石棒出土例は多いのである（山本一九九六a・二〇〇二）。すなわち、柄鏡形（敷石）住居構築↓居住（期間の長短はある）↓住居廃絶に伴い、石棒を持ち込み儀礼的行為を行う（破碎行為が行われる場合もある）↓埋没に伴い、火入れや土器・石器その他の供献や配磔（石）行為↓埋没、というようなプロセスが考えられよう。問題は、なぜ、中期末・後期初頭期に石棒祭祀の停止行為が行われたか、それを問題とすべきなのである。

ところで、緑川東遺跡SV1から検出された「床下土坑1」について、最近、中村耕作が論じている（中村二〇一七）。二〇一七年二月に開催された公開討論会において、「床下土坑についてなぜ誰も触れないのかを問う発言を行ったが、現場で想定した廃屋墓の可能性について言及し得なかった」ので、本稿では「住居床面における石棒と土器の出土状況や、廃屋墓における遺体位置の観点から、この遺構を理解するための情報を整理する」（一頁）ことを目的として論じている。その結果、「SV1の北東に接して検出された竪穴住居跡SI2は攪乱が著しいが、本来同一の柄鏡形住居であり、前者が張出部・後者が主体部とする見解は上記討論会で榎原功一・長田友也より個人的に教示を得た」（二頁）として一体視する考えを明らかにしている。確かに炉址の欠如やSI2は遺存状態は悪いものの、壁柱穴をもつもので、炉址の欠如を考えあわせると魅力的な解釈でもあるが、後期初頭期の柄鏡形敷石住居址として、SV1を張出部としてとらえるには、やや肥大化しており、そうした特徴は後期前葉以降の柄鏡形敷石住居に見られるものであることや、壁際を巡る柱穴や周溝をもつありかたからすると、否定的に見ざるをえない。また、SI2は攪乱を受けているにせよ、一体視した場合、当然主体部にあつたであろう敷石の残骸も認められないのは不自然さを感じる。

SV1に検出された床下土坑については、墓坑の可能性について、中村も指摘している（五頁）ように、別に安孫

子昭二(二〇一五)らがすでに言及しており、八王子市小田野遺跡S I 08と10との類似性も安孫子が同書で指摘している。この床下土坑については、中村は、「石棒設置時には土坑は見えないこととなる」ことから、「家屋墓(住居床下墓坑)」(五頁)としてとらえ、居住時に構築されたものか、もしくは構築時には埋め戻されているので、廃屋墓とは区別している。また、床面倒置土器についても言及し、「中期末葉〜後期初頭の埋葬空間としての張出部」を考慮し、「まず、床下土坑に埋葬し、部分的に敷石敷設しつつ、全面には敷石せず、廃絶時にあらためて石棒と遺体を配置した可能性も考慮しうるだろう」(九頁)と述べている。S V Iを張出部と認識する前提で、類例に当たっているので、その点は疑問なしに非ずであるが、張出部と墓との関係については後述したい。筆者には「床下土坑1」は、その検出位置や並置された石棒との検出状況から判断すると炉址の蓋然性が高いと思われるが、焼土や被熱痕跡がないことから、炉址とする考え方は否定されている。しかし、炉址であってもそのような検出状態もないわけではないので、前述したように構築後間もない時期にこの住居は廃絶に至ったとも考えられ、炉址としての可能性も考慮しておきたい。

石棒が柄鏡形(敷石)住居の廃屋儀礼と深く関わっていた事例の中で好例とされるのが、東京都杉並区光明院南遺跡F地点から発見された「1号住居跡」(中島他二〇一二)例である。中期終末期に属する柄鏡形敷石住居址(わずかに周礫を部分的にもつ)で、火災を受けて、焼土・炭化物が多量に残る。石棒は主体部と張出部との接続部、対ピットに近接して破碎された有頭の完形石棒と、奥壁寄りの壁柱穴近くから周礫とともに横位に検出された無頭石棒の半欠品、石囲炉の炉石材に転用された胴部の石棒の三本が出土している。このうち、接続部に検出された石棒は粉々に破碎されており、この住居が廃絶される際に、石棒を破碎した儀礼行為がうかがえる。なお、その出土状況については、別に中島将太が論じている(中島二〇一五)。

## V 柄鏡形（敷石）住居址の空間分析と構造

阿部昭典は、國學院大學伝統リサーチセンターが行った「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクトの最終成果報告書において、「縄文時代の心の考古学―景観論と『第二の道具論』―」と題する論攷（阿部二〇一二a）を発表している。この論攷は、『第二の道具』の機能・用途とともに儀礼の場と想定される環状列石における空間認識や行為の復元を目的と」して、「対象地域は東北地方北部」（八三頁）を中心として論じられたものである。また、「ランドスケープ論」Ⅱ「景観論」について触れ、「特に観念的景観、つまり人々の空間認識を視座に据えて『景観論』を展開」するに際して、「竪穴住居における空間分割、空間認識について検討を加える」（八七頁）ことを目的としている。直接柄鏡形（敷石）住居址について論じたものではないが、「屋内空間構造の研究史」（八七頁）に触れる中で、柄鏡形（敷石）住居址の空間分割に言及している。すなわち、「縄文時代の住居においては、彼らの世界観（コスモロジー）や社会構造などが反映されている可能性は高く、遺構や集落遺跡の空間構造分析から、当時の空間認識や分割について解明を進める必要がある」（九二頁）という認識を示す。また、「縄文後期になると、東北地方では関東地方からの影響を受けた柄鏡形住居系統の竪穴住居へと変貌」（九四頁）し、「人口部には柄鏡形住居に特有なコの字状やH字状などの溝状遺構が存在する」（九六頁）などと指摘されている。

榎原功一は、近年、縄文中期の住居址の型式・空間構造等に関する多くの論攷を発表している。ここでは、旧稿（山本二〇一〇a）であまり触れなかった、二〇〇九年の論攷（榎原二〇〇九）をみてみよう。榎原は、「柱穴配置・平面プラン、炉などの位置・形態で分類する住居型式と、竪穴住居内の空間区分との関わりを探るため、考古学的に竪穴住居内の空間区分を再確認することを本稿の目的と」して、とくに「竪穴住居内での遺物出土状態から空間区分論へ



の展開が可能かどうか」(九五頁)を考察している。ただ、動産としての出土遺物の出土位置が使用時の原位置を保っているのか、廃棄に伴う可能性、廃屋儀礼のような可能性はないのか、といった点が問題となろう。柄鏡形(敷石)住居址との関連では、石柱・石壇施設を取り上げ、「縄文時代中期後半、炉裏奥壁部の炉と奥壁の間に石壇を設けることがあり、しばしば石柱・石棒が立ち、祭祀空間としてもつとも顕著な施設として知られる。奥壁部がこうした設置場所となるように、曾利Ⅱ式期頃から奥壁部空間は祭祀空間化したことがわかり、炉の左右を中心とする空間区分が確立するらしい」(九六頁)こと、「9期末〜10期以降」(曾利Ⅳ・Ⅴ式以降)、「住居内に敷石を敷く敷石住居が出現しはじめ、10期では柄鏡形敷石住居が成立するなど、住居型式は大きく変容する」、「6期以降」(曾利Ⅰ式期)では、「奥壁部に柱穴が配置されることでほとんど座る余地もなくなり、左側男性区分、右側女性区分」という空間構造が確立すると考えられる」こと、すなわち、「6期以降に左右での男女区分が明確化する傾向」がとらえられ、「男女2区分化・奥壁側祭祀空間化に伴う現象が5期(井戸尻式期：筆者註)に顕著となった後、奥壁部空間縮小化の動きの中で堅穴住居型式は大きく変容する」(一〇九頁)という理解を示している。本稿はその主題が中期後半までの堅穴住居区分の分析にあるという関係上、「9期末〜10期以降」(曾利Ⅳ・Ⅴ式以降)顕在化する住居内敷石の敷設、柄鏡形敷石住居の成立とどうからんでくるのかは明確ではない。

谷口康浩は、二〇〇九年六月に開催された、『平成二一年度フォーラム「環状列石をめぐるマツリと景観」』において、「縄文時代堅穴住居にみる屋内空間のシンボリズム」(谷口二〇〇九)と題する発表を行っている。この発表は、二〇一二年に『國學院大學伝統文化リサーチセンター「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクト最終成果報告書』中に再録されている(谷口二〇一二年a)。また、別に同様な内容の論攷を発表している(谷口二〇一〇a)。ここでは、

二〇一二年の再録された論考をもとにみる。谷口は、「竪穴住居の主軸が特別なものとして意識化されるようになるのは中期中葉以後のことと見られ、主軸に関係したシンボリズムが顕在化してくる。その延長上に成立するものこそ、中期末から後期初頭に盛行した『柄鏡形敷石住居』であり、主軸を強く意識した構造となつて」おり、「竪穴住居の主軸には、縄文人の観念的世界が端的に表現されていたという見通しが立てられる」ことから、「中部・関東地方の中期中葉から後期初頭にかけての事例を取り上げながら、主軸に関係した屋内空間の区分のありかたを検討」（四八二頁）している。埋甕の「埋設位置・埋設姿勢の強い規則性からみると、埋葬や収納の機能よりもやはり境界標もしくは境界としての意味を考えるのが妥当であり、だからこそ、小張出をもつ住居から、柄鏡形態の成立が「一見飛躍的な変化もそう考えてこそ合理的」（四八二頁）であるとの理解を示している。空白が存在するのではなく、中期終末期に埋甕祭祀の場の拡大が劇的になされた結果、柄鏡形態が成立したものとみなせるのである。

また、別に、奥壁部に設置された「石柱・石壇」についても言及している。そして、「中期末葉から後期中葉までの間には、家族・世帯が次第に自立性を強め、家族・世帯間の関係が不均等なものとなる社会的変化があり、「内／外の境界、聖的空間の創出という屋内シンボリズムの強化は、このような社会の複雑化、社会秩序の再編に関連している」（四八六頁）と結論づけている。そのような「社会の複雑化」論については後述するように筆者には異論はある（山本二〇一六）ものの、竪穴住居址あるいは、柄鏡形（敷石）住居址みる「屋内空間」にみる変化は重要な分析視点であることに間違いはない。

本橋恵美子は、敷石住居址の居住空間のあり方について検討を行っている（本橋二〇一三）。本稿は、「柄鏡形住居址を含め、敷石住居址や配石をとまなう竪穴住居址は居住空間が石で用いることによって分割されている。竪穴住居の使い方が附帯施設や遺物などからある程度想定できる可能性がある」ことから「考古学的事象からどこまで住居空

間の意味付けを明らかにできるか追求していく」（一九頁）ことを目的とした論文であるが、結論的には、「敷石が住居使用時点に存在していたかの吟味」を行った結果、「柱穴は敷石を覆っていないことから住居施設として機能していたことを明らかに」し、中期後葉期に「奥壁部と出入口部に特別な祭祀的な空間をもつ特徴があらわれ、加曾利E4式期から称名寺式期にまで、柄鏡形敷石住居に受け継がれている」こと、「後期堀之内1式期になると柄鏡形住居において、住居面積が大きくなるとともに、柄部が拡大していくという形態に変容する」（三二頁）という、従来から指摘されてきた傾向を追認している。

笹森健一は、縄文時代の堅穴住居址の建築構造上の研究を重ねてきているが、そうした成果をもとに、堅穴住居の構造を論じている（笹森二〇一四）。本稿中、後・晩期の堅穴住居址について触れた中で、「関東地方の住居」の、とくに「中期末に、環状集落の『崩壊』する過程で、中部地方から関東地方に柄鏡形住居があらわれる。石が敷かれたものを敷石住居と称するが上屋の架構法等、本質的に同じであり、「敷石住居祭祀遺構と理解されることもあるが堅穴住居である」（三〇五頁）と明快に定義づけている。柄鏡形（敷石）住居址変遷を上屋構造との関連から論じているが、空間利用について触れるところは少ない。

この上屋構造と関連して、篠崎譲治が「柄鏡形堅穴建物」と呼んでいる柄鏡形（敷石）住居址の調査方法について、自らの調査経験を踏まえて提言している（篠崎二〇一五）。篠崎は、「柄鏡形堅穴建物」の多くが「堅穴を、使用面で掘るのを止めず、柄鏡形に廻る礫の外側にある土を覆土（埋土）と捉えて除去し、地山との境まで掘りあげた状態」で報告される事例の多いことを指摘し、実際は、「廻る礫の外側にある土とは、堅穴壁構築土（貼壁）である」（一九頁）として、その調査手順について触れている。調査手順については、とりあえずおくとして、篠崎は、周礫あるいは、縁石と堅穴壁面との間が「裏込」のように埋め立てられているのが真の姿と理解しているようである。本論中に

挙げた「神奈川県玄海田 S I 003」（報告書では S I 006 とされている。：筆者註）事例は、報告書（伊丹他一九九七）によると、この周礫間に壁柱穴が巡っている。篠崎の言う「竪穴壁構築土」の存在が実際に存在したかは、筆者には疑問に思う。いうまでもなく柄鏡形（敷石）住居址と総称されるタイプの住居は、敷石のあり方も千差万別であり、壁柱穴のあり方も、竪穴内の壁沿いに巡るものもあれば、壁外の外周を巡るものなどがあり、しかも時間的な変化を考慮にいれなければならない。篠崎のいう「柄鏡形竪穴建物」に「竪穴壁構築土」が存在した可能性はないとはいえないが、それが通例かどうかは今後、調査に際して慎重な検討が必要となろう。もし、壁に沿って外周する壁柱穴が「竪穴壁構築土」により埋め戻されているとしたら、上面観察でこの埋土上面で柱穴の輪郭（掘り方痕）が確認されるのではないかと思う。その点の検討も今後の調査では必要となろう。

次に、山本典幸の論放についてみる（山本二〇一六）。この論放は、新地平編年グループによる研究会（小林編二〇一四）において発表した内容（山本二〇一四）に基礎をおいたもので、「縄文時代中期終末から後期初頭の柄鏡形敷石住居址をライフサイクルの視点から再検討し」、そのさい、「廃棄の他に放棄・放置された敷石の一部を再使用（リユース）した事例、異なる柄鏡形敷石住居址の間で礫石を分割・分有した事例を敷石の接合例や遺存状態、遺物の出土状況から提示する」（二〇七頁）ことを目的としている。なお、氏が用いる「放棄とは、居住地と利用の企図に反して、残された使用可能な道具や建築物の機能・意味が内的・外的要因によって予期せず完了してしまう行為のことである」（二〇七―二〇八頁）という。山本はマイケル・シファアの形成過程研究のあり方を詳述しているが、そうした理論により、柄鏡形（敷石）住居址を分析する。まず、東京都武蔵台東遺跡発見の「加曾利 E 4 式期の敷石住居址八軒」（二一六頁）を取り上げている。これらはいずれも柄鏡形を呈するものである。検討の結果、「廃絶時に残されていた敷石のうち幾つかの礫石を新築の柄鏡形敷石住居址の一部にリユース（reuse）していた」（二一九頁）可能性が

指摘されている。次に、東京都多摩ニュータウン72・795・796遺跡例を取り上げている。これらはNo.72遺跡に包括される。中期末～後期初頭期の柄鏡形敷石住居址が二五軒検出されている。このうち、18号と26号（建替あり）柄鏡形敷石住居址間に礫石・遺物の接合関係が認められているが、26号が廃絶された後、18号柄鏡形敷石住居構築にあたって、26号柄鏡形敷石住居址の敷石を分割転用されたのではなく、「26号住居跡（新）」と18号住居跡の間で五例ほどの敷石の接合例を確認した点は、敷石の分割行為の介在とは異なる住居址間での同一母岩礫石の分有を意味し、共通の由来をもつ敷石を残した両住居址が同時期に築かれたことを裏付けている」（二二二頁）こと、すなわち、「放棄された26号住居跡（旧）の更新過程において礫石を分割し、18号住居跡と分有した両住居址及び敷石のライフサイクル」（二二三頁）がとらえられるとされている。さらに、出土土器の接合関係から、「中期末から後期初頭にかけて二つの柄鏡形敷石住居址が辿ったライフサイクルとその時間的な変異は、26号住居跡（新）と18号住居跡にそれぞれ居住した人々の社会的紐帯が称名寺Ia・Ib式期に再構成された可能性を意味している」（二二三頁）と理解されている。氏の論旨の根底にある「民族誌的な成果と、物質文化要素の物質性を考慮した理論的素地」（二二四頁）については、ここでは言及しないが、両住居址の礫石の接合、分有関係を「それぞれに居住した人びとの社会的紐帯を再構成するという仮説」（二二四頁）として呈示しているが、氏もいうように「社会的紐帯の具体像」（二二四頁）を明らかにする必要があろう。

## VI 柄鏡形（敷石）住居と墓との関わり

柄鏡形（敷石）住居址の空間分析とも関連するが、石井寛が、後期の住居址内に存在する土坑を取り上げて論じて

いる（石井二〇一一）。「住居址内土坑は住居址主体部内にとどまらず、主体部入口部や張出部でも多く検出されている。これらは埋甕の主要な埋設部位であり、双方の関連性が示される。その一方で、張出部に検出される土坑には、貯蔵穴と推定される一群の存在も明らかとされてきた」が、「張出部への精神性の付与を強調する立場の場合、それら貯蔵穴と推定される事例をも墓壙として捉えてしまう危険性があり、それらを分別・整理する必要がある」ことから、「個別土坑の性格を特定するのは困難な作業となるが、後期住居址に伴って検出される土坑に関わる問題点を抽出してみたい」（四三頁）とする。

後期の住居址、とくに柄鏡形（敷石）住居址に土坑がしばしば検出されるが、これまであまり議論がなされて来なかった。<sup>3</sup>この点について、石井は該当事例を丹念に集成しながら、その特徴や変遷、性格等について論じている。住居址内土坑が確実に住居居住時に構築されたものなのか、墓坑としてとらえることが可能なのか、石井も指摘しているように、とくに貯蔵穴として認識されている土坑との区別など、認定上の問題を抱えているが、柄鏡形（敷石）住居址のとくに張出部空間に設置される事例は居住時に構築された可能性が強いだろう。なお、前述した百瀬貴子のように、小田野遺跡S I 8号柄鏡形住居址内の石囲炉址を「敷石土坑墓」ととらえる考え方（百瀬二〇一二）や、中村耕作のように、緑川東遺跡SV1を張出部と理解し、「床下土坑1」を埋葬施設ととらえて「家屋墓」と考える立場（中村二〇一七）なども同様な視点といえる。

次に阿部友寿の研究について触れてみたい。阿部は近年、精力的に中期から後・晩期の配石墓・配石遺構や住居址について、埋葬との関わりを中心に論を重ねてきている。柄鏡形（敷石）住居址を主題としているわけではないが、関連性が強いので阿部が主張する「遺構更新」について触れた論攷（阿部二〇〇三）を取り上げてみよう。阿部は、「墓壙と配石とが何らかの意図をもって積み重ねられる事象を」、「遺構更新」と呼んで、「過去の記憶」、「墓の記

憶』といった当事者の意識、さらには当時の『祖先観』として導きだ」(九三頁)すことを目的として論じている。墓坑とその上面の配石は密接不離な関係にあり、その場はムラ人たち(あるいは複数のムラムラの人たち)にとつて、そこは、ムラが造営それ続ける限り、墓場(共同墓地)として認識され続けてきたわけであるから、『過去の記憶』『墓の記憶』といった当事者の意識、さらには当時の『祖先観』などは当然のこととして考えられるのであり、「遺構更新」という概念でとらえることに意味があるのかどうか、いささか疑問があるが、それはとりあえずおくとして、「個々の墓壙に対応するように配石遺構が構築されようともその現象のみを取り上げ『墓標』と称するのは、議論を単純化しすぎるように思う」し、「むしろ議論すべきは、個々の墓壙に対応するように配石がなされるのはなぜかということであり、『墓標』という術語を用いるのであれば、その用語の定義が問題とされるべきであろう」(九四頁)とする。上面配石と下部墓壙を個々に切り離して論議するのではなく、継続性Ⅱ阿部のいう「遺構更新」という視点から論ずる必要があるとの指摘であるが、「下部墓壙と上部環状組石遺構との関連、そして、その構築および使用期間であ」り、「上部積石遺構は下部墓壙と何らかの関係をもつて構築されたのか、そして、上部積石遺構のみがなぜ長期的に使用されたといえるのか」(九四頁)という問題を提起し、「長期に形成された事例」と「短期に形成された事例」を挙げてその特徴について触れている(九七―九八頁)。「なぜ長期にわたって墓壙(群)と配石を一定の場所に構築するのか」、それは「どのような意図があるのか」という問いに対して、その「場に対する意図(意識)を示唆する三つの情況」をあげる。すなわち、「一つは使用におけるこの場の強化と特異性、第二に追加遺構の特定性、第三に既存遺構の再利用である」(一一五頁)とされ、「その背後に必然性(意図)があったことを示す情况的証拠をなしている」(一二六―一二七頁)と結論づけ、これを「遺構更新」と呼び、上部配石が下部墓壙の墓標とみなす考えを否定するのである。それまで、上部配石群と下部の土坑墓群を一体視する傾向が強かったが、その点、この阿部の理解は斬新で

あった。この他、阿部は関連する論攷を多数発表しているが、別にあらためて論じてみたい。

谷口康浩も、柄鏡形（敷石）住居址と再葬制との関わりについて最近論じている（谷口二〇一七c）。この論攷は、先に取り上げた竪穴住居址の空間分析論（谷口二〇一二）を受けて、柄鏡形敷石住居址を「景観論」的視点から検討したものである。谷口は、「柄鏡形敷石住居と再葬制との間に関連性を見出しており、一見無関係な二つの文化要素の間に、それらを生み出す共通の思想・観念形態があったと推測している」（二二二頁）。そして「張出部のもつ象徴性」を強調し、「儀礼の痕跡が高い頻度で見出される祭儀空間でもある」（二二三頁）。また、「その成立事情」を考えると、「柄鏡形敷石住居の出現が飛躍的な構造上の変化を伴ったものであったことは否定しがたい」（二二三頁）としている。谷口は、はけうえ遺跡の土器棺と土器棺と推定される埋設土器と土坑のありかたなどから、「再葬制」を考慮する。すなわち、「再葬制の発達は、生死の境界・過渡に対する意識が非常に強まり、葬送儀礼が複雑なプロセスをもつようになったことがその背景にある」（二二四頁）としているが、再葬制を示す事例は谷口も指摘している（二二七頁）ように、いまだ少なく、柄鏡形（敷石）住居と再葬制を強固に結びつけるのはやや問題ではないだろうか。結論的には、「大きな社会変動と環境変化が起こったとされる中期末に柄鏡形敷石住居と再葬制が発達したのは、儀礼やイデオロギーを再編・強化することで社会的動揺を抑え、集団の存続と社会統合の維持を図ろうとした意識の表れで」（二二八頁）あったとする考え方には大筋において異論はない。いずれにせよ、中期末葉の柄鏡形（敷石）住居の出現は、そのような社会的・歴史的变化の脈絡の中で読み取らねばならない。



## VII 近年の中期末く後期初頭の土器型式・編年研究

柄鏡形(敷石)住居が成立をみた中期末く後期初頭期の土器編年をめぐっては、近年においても活発な論議がなされてきている。主だった研究成果を概観すると、二〇〇七年二月には、縄文セミナーの会が『第二〇回セミナー 中期終末から後期初頭の再検討』(縄文セミナーの会編二〇〇七a)を開催し、該期の豊富な土器資料が集成され、活発に行われた研究発表と討議の記録(縄文セミナーの会編二〇〇七b)もまとめられている。また、二〇〇八年には、千葉毅が修士論文をまとめた「加曾利EV式」をめぐる詳細な研究成果が公表され(千葉二〇〇八)、当該期の土器様相・変遷観が明らかにされた。二〇一三年四月には、公開シンポジウム『関東甲信越地方における中期/後期変動期』実行委員会により、「公開シンポジウム 関東甲信越地方における中期/後期変動期」実行委員会編二〇一三、当該期の土器をめぐって、千葉毅(二〇一三)、加納実(二〇一三)、鈴木徳雄(二〇一三)、綿田弘実(二〇一三)などによって論じられている。また、同年、一〇月には、日本考古学協会二〇一三年度長野大会が開催され、分科会Ⅱ「長野県における縄文時代中期土器の編年と動態」において、長野県各地域の当該期の土器の分布、変遷が論じられ、分厚い資料も刊行され(日本考古学協会二〇一三年度長野大会実行委員会編二〇一三)、長野県域の中期土器変遷と地域性が明らかにされている。このほか、前述したように、四本の完形石棒が出土した国立市緑川東遺跡第二七地点の報告書において、黒尾和久がSV1から出土した土器について分析し、加曾利EV式、北白川C式4段階、中津式土器との関係を論じている(黒尾二〇一四)。同年三月には、小林謙一ら新地平編年グループが「研究集会 縄文研究の地平二〇一四―縄文時代中期末葉から後期初頭の文化変化―」(小林謙一編二〇一四)を開催し、当該期の土器の様相につ

いても論じられている。二〇一六年三月には、同グループが新たな「新地平編年の再構築」を目指して、「シンポジウム 縄文研究の地平二〇一六―新地平編年の再構築―」（縄文研究の地平グループ・セツルメント研究会編二〇一六）を開催した。さらに相前後して、横浜市歴史博物館において企画展「称名寺貝塚 土器とイルカと縄文人」（石井他二〇一六）と、それにあわせてシンポジウム「称名寺貝塚と称名寺式土器」（横浜市歴史博物館編二〇一六）が開催され、称名寺式土器とその時代をめぐる研究発表と討議がなされた。

このように、代表的な土器研究を取り上げてみても、称名寺式土器とそれに共伴する「加曾利EⅤ式土器」を中心とした論議が活発に行われてきたといえる。この時期、西日本との土器交流も盛んであり、これと、柄鏡形（敷石）住居址がどのような関係にあるのかも問題となってくる。そうした意味で、近年の細かな土器編年研究の進展は、柄鏡形（敷石）住居址研究においても、正確な時間的位置を与えるといううえで重要な研究といえるのである。

## VIII 階層化・社会の複雑化論と柄鏡形（敷石）住居址

縄文時代社会の、とくに後・晩期を階層化した社会とみる見解が多い。筆者は、かつて民族（誌）考古学や階層化社会論に疑念を呈したことがある（山本一九九一・二〇〇五・二〇〇六aなど）が、今もその立場に変わりはない。そのことについては最近も論評してみた（山本二〇一六）ので、それを参照願いたい。佐々木藤雄による筆者への批判（佐々木二〇〇三）に端的なように、階層化社会論・社会の複雑化論は縄文社会を読みとるキーワードともなっているのが現状である。最近発表された佐々木の論攷（佐々木二〇一六・二〇一七）も、とくに旧稿と変化ない。筆者の見解は旧稿（山本二〇〇四・二〇一〇b）に示したとおりである。

ここでは、まず、最近発表された石坂茂の論攷（石坂二〇一七）について触れてみたい。石坂はこれまでも、関東・中部地方の配石遺構、環状列石、柄鏡形敷石住居址等について論攷（石坂二〇〇二・二〇〇四・二〇一）を発表しており、そこに階層性を認める立場を明らかにしている。本稿では、石坂の見解を否定的にとらえた筆者の考え（山本二〇〇六a）に対して、論の冒頭において、「核家屋」を石坂なりに再定義したうえで、山本の見解は、「基本認識とは対極に位置」し、「事実認定に大きな差がある」（二頁）との認識を示す。いうまでもなく、事実認定に差があれば、当然ながら、核家屋⇨階層化した柄鏡形敷石住居なる認識は成立しない。とくに、石坂があげる「当該柄鏡形敷石住居とその張出部に連接する弧状列石の構築の同時性の有無とその機能・性格」（二頁）をどうとらえるのが問題になることはいうまでもない。しかし、本稿を含めて、疑いなく「同時性」があるという根拠は明確ではない。石坂は「複数単位の『核家屋』を有する集落をここでは便宜的に『核家屋』集落と呼称しておきたい」（二頁）として、関東・中部域に二六遺跡を挙げている。分析の基礎をなしているのは、八ッ場ダム建設に伴い調査された群馬県吾妻郡長野原町横壁中村遺跡である。石坂の言う、「張出部基底部に『配石施設』⇨弧状列石を有する『核家屋』（一頁）は、横壁中村遺跡では、「堀之内1式期」に出現し、「加曾利B1式期まで継続的に認められ」（三―四頁）る四単位に分かれるとされている。そうした観点から石坂の説明と図面をみると柄鏡形敷石住居址とそれに付随するとされる弧状列石が同時存在したものと断定できる根拠が見当たらない。後期前葉から中葉にかけて出現する周堤礫を伴う、あるいは、環礫方形配石の存在は、柄鏡形敷石住居廃絶に伴う儀礼行為として構築された可能性については何度も指摘してきたところでもある。石坂は「柄鏡形敷石住居の構築に伴い斜面地を切り盛り整地した雑壇状の法面を被覆する状態で」、「住居張出基部両側に石垣状あるいは葺石状に時間差を置くことなく設置したものであり」、「山本の主張するような時間差を想定した『廃屋儀礼』では、こうした構築状況は生起し得ない」（一九頁）と断じている。こ

の論議は、事実の認識をどうするか以前に「核家屋」＝階層化を示す住まいありきの立場があるわけで、いささか水掛け論ならざるを得ないというのが正直な感想である。

なお、阿部友寿も、柄鏡形敷石住居址に接続するかに見られる列状・弧状配石とそれに伴う墓壇について論じている（阿部二〇一四）。石井や石坂の見解に近い。また、階層化社会論は、柄鏡形（敷石）住居址に関わって論議が始まったわけではないので、その点の議論について、ここで深く論ずることは避けるが、谷口康浩も、階層化社会論の立場を鮮明に示している一人である（谷口二〇一〇 a・b・二〇一二・二〇一七 a・b・c）。そのような社会として後・晩期をとらえることが可能かどうか、さらに論議を深めていかねばならない。

#### Ⅸ 環境変動と中期終末期の文化衰退要因

柄鏡形（敷石）住居址が出現する中期終末期から後期初頭期にかけては、それまで造営され続けてきた大規模な環状集落の形成が崩壊を迎える時期に合致する。その要因をめぐっては、これまで、環境の変化、気候の冷涼化が急速に進んだことが大きな要因であるという考え方が支配的であった。筆者は、この問題をめぐって、平成二三―二五年に科学研究費の交付を受けて、「関東・中部地方における縄文時代中期大規模環状集落崩壊過程をめぐる研究」に取り組み、その研究成果の公開を兼ねて、二〇一三年一月に、「シンポジウム 山梨・茅ヶ岳山麓における縄文時代中期文化の盛衰」を、関係研究者の協力をえて開催した（山本編二〇一三）。シンポジウムでは、「縄文時代中期大規模環状集落盛衰のもつ意味」（山本二〇一三 b）と題する発表を行った。また、別にこれに関わる論攷（山本二〇一三 a）を発表し、研究成果の報告書（山本編二〇一四）を刊行している。そこでの観点は、中期環状集落の崩壊要因は

気候変動だけではなく、中期社会のもつ内部矛盾が大きな影響を与えたとする考え方であり、柄鏡形（敷石）住居の出現を、中期末から後期初頭期という関東・中部地方での変動期とどうからませて論ずるべきかという、重要な視点がある。

気候変動との関係については、米田 稔（二〇一三）が、「縄文時代中期から後期への人口減少に着目して、どのような環境変動がこの人口激減をもたらしたのかを考察」（一一頁）している。とくに「東日本全域におよぶ寒冷化が人口激減の原因でないか」とするなら、「人々の食生活にも大きな影響を与えたはずだ」（一二頁）という仮説から検討を加えている。そこで氏の専門である「同位体生態学」からの分析が行われるが、「中期末から後期初頭の時期に少なくとも東京湾東岸に住んだ人々の食生活には大きな変化が認められなかった」という「意外な結果になった」（二三頁）とされ、有意な結論が出されていない。この時期に環境の変化による人口の激減を想定するなら、人骨そのものの形質変化（飢えの痕跡）あるいは、死者の増加による埋葬人骨事例の増大があつたのかどうかといった点も考慮に入れて論じなければならぬだろう。氏も指摘するように「遺跡に残された直接的な証拠から、寒冷期の実態を実証的なデータで指摘した研究は少ない」（二七頁）ことがやはり問題なのである。

鈴木保彦もまた、環境変動説に立って、筆者の見解を強く批判する（鈴木二〇一四・二〇一七）。二〇一四年発表の論攷では、「縄文時代の気候は一定ではなく、温暖化や寒冷化という気候変動が認められ」、このことと「隆盛と衰退を繰り返す縄文集落の動態との関係は無視することができず、むしろ重要な要素であつた」（二頁）とする前提に立ち、関東・中部域を中心とした地域での草創期から晩期に至る、縄文集落の盛衰を論じている。気候変動がもたらした端的な現象としては、約六、〇〇〇年前の、地球規模による温暖化による海水準の上昇、いわゆる「縄文海進」があげられる。海水準の上昇に伴い関東地方奥深く入り江が形成され、そこに多数の集落と貝塚が形成された。まさに

温暖化がもたらした縄文集落の安定性と発展の姿をみてとることができる。筆者は、こうした環境・気候変動が、縄文文化の発展・衰退に大きな影響力を与えたとする考え方を全く否定するわけではない。確かに、鈴木が検証するように縄文時代の長い時間幅の中で、気候は寒暖を繰り返して、縄文文化の発展・盛衰に大きな影響力を与えたことは確かであろう。筆者が問題としているのは、あれだけ急激な発展を遂げた中期縄文文化（この場合、関東・中部域を中心とするが）がなぜ、中期終末から後期初頭期に、まさしくドラスティックな衰退を遂げ、大規模な拠点的環境集落の崩壊に至った理由、それとともに、こつ然とでもいうあり方で出現をみた柄鏡形（敷石）住居や配石構築物が、環境変動・気候冷涼化だけで説明がつくものかという疑問から問題提起したものである。この時期は、まさしく縄文文化（いうまでもなく関東・中部域を中心とした）の変遷上、一大転換点・画期とみなされるのであり、その後の後期以降の文化的ありかたや集落規模の縮小化傾向を見る時、単純に環境変動だけで解釈がつくものなのかどうかという疑問からなのである。なお、東北地方からみた縄文文化の盛衰に触れた阿部昭典も、こうした考え方に懐疑的な見解を明らかにしている（阿部二〇一二b・二〇一五など）。中期末葉における環状集落の崩壊要因をめぐることは、さらなる論議が必要であろう。

## X おわりに

以上、長々と、柄鏡形（敷石）住居址をめぐる近年の研究動向と課題について、分野別に検討を試みてみた。紙数の都合上、個々の研究に詳しく触れて論評できなかったことや、他に触れるべき分野や論点があるかと思うが、その不備は追って補完することとしたい。本稿で示したように、近年の柄鏡形（敷石）住居址に関わる研究動向も、多

方面にわたって活発な論議がなされていることをあらためて認識することができた。しかも、それは、なにか一定の結論が出されているものでもなく、見解の対立もまた顕著である。本稿では筆者なりの立場から柄鏡形(敷石)住居址に対する考え方を呈示してみた。引用や論攷等に対する理解に不十分な点があることを危惧するが、ここで取り上げたさまざまな課題について今後とも活発な論議が行われて、柄鏡形(敷石)住居址をめぐる研究が、さらに進展していくことを期待して本稿を終えることとする。

## 註

(1) これまで、敷石住居址、柄鏡形住居址、柄鏡形敷石住居址などと呼ばれてきた遺構の総称として、筆者は「柄鏡形(敷石)住居址」と総称することを提案している(山本二〇〇二、三頁ほか)。以下においても総称として用いることとする。

(2) 本稿では、二〇一一年以降に発表された論攷等を中心に触れることとする。それ以前に発表されている論攷等については、これまで論評を加えているものは、旧稿を参照願うとして、ここでは重複して取り上げることは避けている。ただ、二〇一一年以前に発表されている論攷等についても論評していないものや関連で必要とする場合は取り上げることにする。

(3) 柄鏡形(敷石)住居址の張出部が埋葬空間の可能性のあることを論じたものとしては、古くは村田文夫の見解があ

る(村田一九七五)。

## 引用・参考文献

- 相川 薫他 二〇〇九 『東京都八王子市小田野遺跡―第四次・第五次発掘調査報告書―』 社会福祉法人永寿会・有限会社 吾妻考古学研究所
- 安孫子昭二 二〇一五 『大形石棒四本が出土―国立市緑川東遺跡・立川市向郷遺跡―』 『東京の縄文学』、一一一―一一九頁、之潮
- 阿部昭典 二〇〇〇 『縄文時代中期末葉―後期前葉の変動― 複式炉を有する住居の消失と柄鏡形敷石住居の波及―』 『物質文化』 第六九号、一―三九頁、物質文化研究会
- 阿部昭典 二〇一二 a 『縄文時代の心の考古学―景観論と『第二の道具論』―』 『祭祀儀礼と景観の考古学』 (『國學院大學伝統文化リサーチセンター』 『祭祀遺跡に見るモノと心』) プ

ロジエクト最終成果報告書)、八三―一三八頁、國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクト

阿部昭典二〇一〇二b「東北地方における後期初頭の社会変動―越後から見る縄文社会―」「公開シンポジウム予稿集東北地方における中期/後期変動期43Kcイベントに関する考古学現象①」、一―一六頁 東北芸術工科大学東北文化研究センター

阿部昭典二〇一五「縄文の儀器と世界観―社会変動期における精神文化の様相―」知泉書館

阿部友寿二〇〇三「縄文後晩期における遺構更新と『記憶』―後晩期墓壙と配石の重複関係について―」『神奈川考古』

第三九号、九三―一二〇頁、神奈川考古同人会

阿部友寿二〇一四「住居址に伴う配石と墓坑」『神奈川考古』

第五〇号、四九―六八頁、神奈川考古同人会

五十嵐彰二〇一六「緑川東問題―考古学的解釈の妥当性について―」『東京考古』三四、一―一七頁、東京考古談話会

五十嵐彰二〇一七a「緑川東・廃棄時設置という隘路」『東京の遺跡』No.一〇七、三―四頁、東京考古談話会

五十嵐彰二〇一七b「私たちは緑川東をいかに読むべきか―テキストとしての考古資料―」「公開討論会「緑川東遺跡の大形石棒について考える」資料集」、二七―二九頁、東京

考古談話会

石井寛二〇一〇一「縄文時代後期の住居址内土坑」『縄文時代』第二二号、四三―七二頁、縄文時代文化研究会

石井寛二〇一四「縄文中期から後期への推移に関する一考察―横浜・市港北2-1遺跡群を対象に―」『横浜市歴史博物館紀要』Vol.一八、一―四〇頁、横浜市歴史博物館

石井寛他二〇一六「称名寺貝塚土器とイルカと縄文人」『横浜市歴史博物館』

石坂茂二〇〇二「縄文時代中期末葉の環状集落の崩壊と環状列石の出現―各時期における拠点集落形成を視点とした地域的分析―」『研究紀要』第二〇号、七―一〇二頁、

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

石坂茂二〇〇四「関東・中部地方の環状列石―中期から後期への変容と地域の様相を探る―」『研究紀要』第二二号、

五―一九四頁、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

石坂茂二〇一〇「配石遺構にみる階層の様相」『考古学ジャーナル』No.六一二、二二―二六頁、ニューサイエンス社

石坂茂二〇一七「核家屋」集落の構造―群馬県横壁中村遺跡を中心とした分析―「縄文時代」第二八号、一―二六頁、縄文時代文化研究会

伊丹徹他一九九七「長津田遺跡群Ⅲ 玄海田遺跡・玄海田南遺跡 長津田地区特定土地地区画整理事業に伴う発掘調



「査」(かながわ考古学財団調査報告)一四(財)かながわ考古学財団

宇佐見哲也二〇二二「武蔵野台地東辺における縄文時代中期の集落景観」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一七二集、二五五―三二五頁、国立歴史民俗博物館

海老原郁雄・永岡弘章二〇一六「北関東・堀之内期の柄鏡型住居」『唐沢考古』第三五号、四三―五七頁、唐沢考古会

大河原勉二〇一〇「摺上川流域における縄文時代中期末葉―後期前葉の住居跡について」『福島県文化財センター白河館研究紀要二〇〇九』、三三―五〇頁、財団法人福島県文化振興事業団

長田友也二〇一四a「石棒儀礼にみる様相―国立市緑川東遺跡例を中心に―」『研究集会縄文研究の地平二〇一四―縄文時代中期末葉から後期初頭の文化変化―発表要旨集』、長田一―五頁、小林謙一編

長田友也二〇一四b「国立市緑川東遺跡を石棒から読む」『東京都国立市緑川東遺跡―第二七地点―介護老人保健施設国立あおやぎ苑増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』、一五七―一六五頁、医療法人社団 国立あおやぎ会・株式会社ダイサン

長田友也二〇一四c「緑川東遺跡の敷石遺構出土の大型石棒について」『開館二〇周年記念秋季企画展くにたち発掘

―最近の発掘調査から―』、三八―四二頁、くにたち郷土文化館

長田友也二〇一七「石棒の樹立と安置」『公開討論会「緑川東遺跡の大形石棒について考える」資料集』、三〇―三一頁、東京考古話会

加納実二〇一三「中期末―後期初頭期における東西関係について―土器群の併行関係を巡る諸問題を中心に―」『公開シンポジウム予稿集 関東甲信越地方における中期/後期変動期』、35―41頁、イベントに関する考古学現象③、三五―四〇頁、公開シンポジウム『関東甲信越地方における中期/後期変動期』実行委員会

川島裕毅二〇一七「縄文時代中期末から晩期の住居形態にみる南関東の東西差―神奈川と千葉の事例から―」『印旛郡市文化財センター研究紀要』八、一〇三―一三五頁、財団法人印旛郡市文化財センター

川島裕毅二〇二二「武蔵野地域と下総地域における柄鏡形住居の受容比較」『印旛郡市文化財センター研究紀要』九、八五―一〇六頁、財団法人印旛郡市文化財センター

川島義一、二〇一七「柄鏡形住居の出現期の再検討―地域の遺跡群研究の視点から―」『國學院大學大学院紀要―文学史料』第四八輯、一九三―二〇頁、國學院大學大学院 柳原功一、二〇〇九「縄文時代中期の竪穴住居内における空

間区分)『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第二三集、九五―一〇頁、帝京大学山梨文化財研究所

黒尾和久二〇一四「緑川東遺跡の住居変遷と縄文中期末葉―後期初頭の土器」『東京都国立市緑川東遺跡―第二七地点―介護老人保健施設国立あおやぎ苑増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』、一四九―一五六頁、医療法人社団 国立あおやぎ会・株式会社ダイサン

黒尾和久二〇一六「編集余白メモ 考古学的判断の妥当性とは」『緑川東問題』という問題提起への応答―『東京の遺跡』No.一〇六、八頁、東京考古談話会

黒尾和久二〇一七「敷石遺構SV1出土石棒の『並置』タイミング」『公開討論会「緑川東遺跡の大形石棒について考える」資料集』、三―四頁、東京考古談話会

公開シンポジウム『関東甲信越地方における中期/後期 変動期』実行委員会編二〇一三「公開シンポジウム予稿集 関東甲信越地方における中期/後期変動期」のイベントに関する考古学現象③

國學院大学考古学資料館研究室編二〇一〇『縄文人の石棒―大形石棒にみる祭儀行為―』(國學院大学学術資料館プロジェクト「考古学資料館収蔵資料の再整理・修復および基礎研究・公開シンポジウム発表要旨集」)國學院大学研究開発推進機構学術資料館・國學院大学考古学資料館研究室

小島秀彰二〇一七「福井県若狭湾岸地域における縄文時代の東西交流について」『二世紀考古学の現在』(山本暉久先生古稀記念論集)、五七―六六頁、山本暉久編、六一書房

小林謙一編二〇一四『研究集会 縄文研究の地平二〇一四―縄文時代中期末葉から後期初頭の文化変化―発表要旨集』

佐々木竜郎他二〇一四「下北原遺跡Ⅲ 伊勢原浄水場排水処理棟建設に伴う発掘調査」(『神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書』二七)(株)玉川文化財研究所

佐々木藤雄二〇〇三「柄鏡形敷石住居址と環状列石」『異貌』第二一号、一一―一二九頁、共同体研究会

佐々木藤雄二〇一六「中間地帯の環状列石」『異貌』第三三三―三三六頁、共同体研究会

佐々木藤雄二〇一七「追考 縄文社会論と日本考古学」『異貌』第三四号、四六―九五頁、共同体研究会

笹森健一二〇一四「堅穴住居の構造」『縄文時代下』(『日本の考古学講座』第四卷)、二七―三三頁、青木書店

篠崎譲治二〇一五「柄鏡形堅穴建物の調査方法と手順」『東京考古』三三、一九―二六頁、東京考古談話会

縄文研究の地平グループ・セツルメント研究会編二〇一六『シンポジウム 縄文研究の地平二〇一六―新地平編年の

## 再構築―発表要旨

縄文セミナーの会編二〇〇七a 『第二〇回セミナー 中期終

末から後期初頭の再検討』縄文セミナーの会

縄文セミナーの会編二〇〇七b 『第二〇回セミナー 中期終

末から後期初頭の再検討―記録集―』縄文セミナーの会

清水周二〇一三 『四本の大形石棒を伴う敷石遺構・国立市

緑川東遺跡』『東京の遺跡』No.九九、一―二頁、東京考古談

話会

鈴木克彦・鈴木保彦編二〇〇九 『集落の変遷と地域性』(『シ

リーズ縄文集落の多様性』I) 雄山閣

鈴木克彦編二〇一一 『生活・生業』(『シリーズ 縄文集落の

多様性』Ⅲ) 雄山閣

鈴木克彦編二〇一四 『信仰・祭祀』(『シリーズ 縄文集落の多

様性』Ⅳ) 雄山閣

鈴木徳雄二〇一三 『称名寺式前後の土器の存在形態と変化

―土器系統の存在形態と器種の推移―』公開シンポジウム

予稿集 関東甲信越地方における中期／後期変動期<sup>③</sup>

イベントに関する考古学現象<sup>③</sup>、五一―六九頁、公開シン

ポジウム 『関東甲信越地方における中期／後期変動期』実

行委員会

鈴木保彦二〇一四 『晩氷期から後氷期における気候変動と

縄文集落の盛衰』『縄文時代』第二五号、一―二八頁、縄文

## 時代文化研究会

鈴木保彦二〇一七 『縄文時代における気候変動と縄文文化』

『二世紀考古学の現在』(『山本暉久先生古稀記念論集』)、

三五―四四頁、山本暉久編・六一書房

谷口康浩二〇〇九 『縄文時代竪穴住居にみる屋内空間のシ

ンボリズム』『平成二二年度フォーラム』『環状列石をめぐる

マツリと景観』発表資料集、四一―四九頁、國學院大學伝

統文化リサーチセンター 『祭祀に見るモノと心』グループ

谷口康浩二〇一〇 a 『縄文時代竪穴家屋にみる空間分節と

シンボリズム』『國學院大學伝統文化リサーチセンター研

究紀要』第二号、三七―四七頁、國學院大學研究開発推進

機構伝統文化リサーチセンター

谷口康浩二〇一〇 b 『縄文時代概念の基本的問題』『縄文文

化の輪郭 比較文化論による相対化』(『縄文時代の考古

学』I)、三一―三三頁、同成社

谷口康浩二〇一一 『縄文時代竪穴住居にみる屋内空間のシ

ンボリズム』『祭祀儀礼と景観の考古学』(『國學院大學伝統

文化リサーチセンター』『祭祀遺跡に見るモノと心』プロジ

ェクト最終成果報告書)、四八一―四八八頁、國學院大學

研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター 『祭祀遺跡に

見るモノと心』プロジェクト

谷口康浩二〇一七 a 『環状集落にみる社会複雑化』『歴博フ

オラム 縄文時代 その枠組・文化・社会をどう捉えるか?、一三八―一六一頁、山田康弘・国立歴史民俗博物館編・吉川弘文館

谷口康浩 二〇一七b『縄文時代の社会複雑化と儀礼祭祀』同社

谷口康浩 二〇一七c『柄鏡形敷石住居と再葬制の接点』二

一世紀考古学の現在』(山本暉久先生古稀記念論集)二一一―二二二頁、山本暉久編・六一書房

谷口康浩編 二〇二二『縄文人の石神く大形石棒みる祭儀行為』(『考古学リレー』二〇) 六一書房

千葉毅 二〇〇八『修士論文平成二〇年度(二〇〇八) 加曾利E式土器の終末―異系統土器の貫入・拡散についての基礎的研究』

千葉毅 二〇一三『関東甲信越地方における称名寺式土器と加曾利E式土器の混在の様相』『公開シンポジウム予稿集 関東甲信越地方における中期/後期変動期』(3)イベントに関する考古学現象③、二二―三三頁、公開シンポジウム「関東甲信越地方における中期/後期変動期」実行委員会

東京考古談話会編 二〇一七a『公開討論会「緑川東遺跡の大形石棒について考える」資料集』東京考古談話会

東京考古談話会編 二〇一七b『記録公開討論会「緑川東遺跡

の大形石棒について考える』自由討論記録』『東京考古』三五、一―二〇頁 東京考古談話会

中島将太 二〇一五『大形石棒の出土状況 東京都光明院南遺跡を中心として』『考古学ジャーナル』No.六七八、二二―二七頁、ニユーサイエンス社

中島将太他 二〇二二『東京都杉並区光明院南遺跡F地点納骨堂建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(杉並区埋蔵文化財調査報告書)第六一集) 宗教法人慈雲山萩寺光明院・杉並区教育委員会・杉並区内遺跡発掘調査団

中村耕作 二〇一七『縄文時代中期末葉から後期初頭柄鏡形住居床面の石棒・土器・屋内土坑―国立市緑川東遺跡SV1をめぐる―』『史峰』第四五号、一―一八頁、新進考古学同人会

新津健 一九九二『縄文晩期集落の構成と動態―八ヶ岳南麓・金生遺跡を中心に―』『縄文時代』第三号、九六―一二九頁、縄文時代文化研究会

西村広経 二〇一四『縄文時代晩期の堅穴住居跡について』『縄文時代後・晩期社会の研究―千葉県印西市師戸戸ノ内貝塚発掘調査報告書―』(『早稲田大学文学部考古学研究室調査報告』、二〇三―二二頁、早稲田大学文学術院考古学コース

西村広経 二〇一五『関東における縄文時代後・晩期の堅穴

- 住居儀礼』『東京大学文学部考古学研究室紀要』第二十九号、二五—六〇頁、東京大学文学部考古学研究室
- 日本考古学協会二〇一三年度長野大会実行委員会編二〇一三『文化の十字路 信州』（一般社団法人日本考古学協会二〇一三年度長野大会研究発表資料集）、『発表要旨』
- 福島雅儀二〇一二「阿武隈川上流域における縄文中期から後期への集落変化 福島県三春町柴原A遺跡と越田和遺跡の発掘調査から」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一七二集、三五七—四一四頁、国立歴史民俗博物館
- 村田文夫一九七五「柄鏡形住居址考」『古代文化』第二八卷一一号、一一三—三頁、(財)古代学協会
- 村田文夫二〇一一「東京都八王子市小田野遺跡の縄文集落復元への一試論—SI08・SI10遺構を中心に—」『旃檀林の考古学—大竹憲治先生還暦記念論文集—』、八三—九六頁、大竹憲治先生還暦記念論文集刊行会
- 本橋恵美子一九八八「縄文時代における柄鏡形住居址の研究—その発生と伝播をめぐって—」『信濃』第四〇巻八号・九号、三二—四四頁・五二—六五頁、信濃史学会
- 本橋恵美子二〇一三「敷石住居址における居住空間の検討」『東国の考古学』、一九—三四頁、群馬考古学研究会編・六一書房
- 本橋恵美子二〇一七「縄文時代における柄鏡形住居址の再検討」『二世紀考古学の現在』（山本暉久先生古稀記念論集）、二二—三—三四頁、山本暉久編・六一書房
- 百瀬貴子二〇一二「あの世の集落(三) 東京都八王子市小田野遺跡SI8の再検討」『土壁』第一二号、九—一〇〇頁、考古学を楽しむ会
- 山本暉久一九七六「敷石住居出現のもつ意味」『古代文化』第二八卷二号・三号、一—三七頁・一—二九頁、(財)古代学協会
- 山本暉久一九七九「石棒祭祀の変遷」『古代文化』第三一卷一一号・二二号、一—四二頁・一—二四頁、(財)古代学協会
- 山本暉久一九九一「縄文時代文化研究とエスノアーケオロジー—最近の研究動向をめぐって—」『縄文時代』第二号、一一—一九—二四頁、縄文時代文化研究会
- 山本暉久一九九四「石柱・石壇をもつ住居址の性格」『日本考古学』第一号、一一—二六頁、日本考古学協会
- 山本暉久一九九六a「柄鏡形(敷石)住居と石棒祭祀」『縄文時代』第七号、三三—三七頁、縄文時代文化研究会
- 山本暉久一九九六b「敷石住居址研究の現状と課題」『パネルディスカッション「敷石住居の謎に迫る」』資料集、一一—一頁、神奈川県立埋蔵文化財センター・財団法人かながわ考古学財団

山本暉久一九九八「柄鏡形（敷石）住居と廃屋儀礼―環磔方形配石と周堤礫―」『列島の考古学』（渡辺誠先生還暦記念論集）、三三五―三五二頁、渡辺誠先生還暦記念論集刊行会

山本暉久一九九九「遺構研究 敷石住居址」『縄文時代文化研究の一〇〇年』（『縄文時代』第一〇号）、一一三―一三〇頁、縄文時代文化研究会

山本暉久二〇〇二「敷石住居址の研究」六一書房

山本暉久二〇〇四「柄鏡形（敷石）住居址をめぐる最近の研究動向について」『縄文時代』第一五号、一九三―二一六頁、縄文時代文化研究会

山本暉久二〇〇五「縄文時代階層化社会論の行方」『縄文時代』第一六号、一一―一四二頁、縄文時代文化研究会

山本暉久二〇〇六 a 「配石と敷石をもつ縄文集落に階層化社会は読み取れるのか」『茅野市尖石縄文考古館開館五周年記念論集』六四―八一頁、茅野市尖石縄文考古館

山本暉久二〇〇六 b 「浄火された石棒」『神奈川考古』第四二号、三七―六五頁、神奈川考古同人会

山本暉久二〇一〇 a 「柄鏡形（敷石）住居址研究をめぐる最近の研究動向について」『柄鏡形（敷石）住居と縄文社会』、三一―三二頁、六一書房

山本暉久二〇一〇 b 「柄鏡形（敷石）住居と縄文社会」六一

書房

山本暉久二〇一〇「二〇一〇年の縄文時代学界動向 遺構論（敷石住居）」『縄文時代』第二二号、二七二―二七五頁、縄文時代文化研究会

山本暉久二〇一〇 a 「東日本における縄文時代中期大規模環状集落の崩壊要因をめぐる」『縄文時代』第二四号、一七―一三三頁、縄文時代文化研究会

山本暉久二〇一〇 b 「総論 縄文時代中期大規模環状集落 盛衰のもつ意味」『シンポジウム 山梨・茅ヶ岳山における縄文時代中期文化の盛衰 発表要旨・資料集』、一一―一〇〇頁、昭和女子大学文化史学会

山本暉久二〇一四「中部山地における柄鏡形敷石住居の終焉」『神奈川考古』第五〇号、六九―九二頁、神奈川考古同人会

山本暉久二〇一六「縄文後・晩期社会論―住居・集落・社会の複雑化―」『神奈川考古』第五二号、八三―九四頁、神奈川考古同人会

山本暉久編二〇一三『シンポジウム 山梨・茅ヶ岳山麓における縄文時代中期文化の盛衰 発表要旨・資料集』昭和女子大学文化史学会

山本暉久編二〇一四「関東・中部地方における縄文時代中期大規模環状集落崩壊過程をめぐる研究」〔独立行政法人日

本学術振興会 科学研究費補助金基盤研究 (C) 平成二三—二五年度研究成果報告書」)

山本典幸二〇一四「敷石住居址の構築から廃絶までのプロセスと景観の変化」『研究集会縄文時代の地平二〇一四—縄文時代中期末葉から後期初頭の文化変化— 発表要旨集』、山本一—五頁、小林謙一編

山本典幸二〇一六「縄文時代中期終末から後期初頭の柄鏡形敷石住居址のライフサイクル」『古代』第一三八号、二〇七—二二八頁、早稲田大学考古学会

雄山閣編集部編二〇一〇『葬墓制』(「シリーズ縄文集落の多様性」Ⅱ) 雄山閣

横浜市歴史博物館編二〇一六『称名寺貝塚と称名寺式土器』(公益財団法人三菱財団平成二七年度人文科学研究助成横浜市歴史博物館企画展「称名寺貝塚」関連シンポジウム資料) 横浜市歴史博物館

吉澤宏二〇一七「相模川流域における屋内儀礼の様相—立柱(石柱)と共伴する埋葬の事例を中心として—」『二世紀考古学の現在』(「山本暉久先生古稀記念論集」)、一九—二〇〇頁、山本暉久編・六一書房

米田稜二〇一三「縄文時代の環境変動と食生活」『環境の日本史』二『古代の暮らしと祈り』、八一—三〇頁、三宅和朗編・吉川弘文館

綿田弘実二〇一三「中部高地における縄文中期後葉から後期前葉の土器変遷」『公開シンポジウム予稿集 関東甲信越地方における中期/後期変動期Y3Kイベントに関する考古学現象③』、七一—八〇頁、公開シンポジウム「関東甲信越地方における中期/後期変動期」実行委員会

綿田弘実二〇一七「千曲川下流域における縄文時代中期の住居跡—長野県中野市千田遺跡の中期後葉土器と住居変遷—」『二世紀考古学の現在』(「山本暉久先生古稀記念論集」)、一五七—一六七頁、山本暉久編・六一書房

和田哲二〇〇二「多摩の敷石住居」『多摩考古』三二、一一—二三頁、多摩考古学研究会

和田哲二〇一四 a 「敷石遺構と石棒」『東京都国立市緑川東遺跡—第二七地点—介護老人保健施設国立あおやぎ苑増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』、一六六—一七五頁、医療法人社団 国立あおやぎ会・株式会社タイサン

和田哲二〇一四 b 「緑川東遺跡の敷石遺構と石棒」『開館二〇周年記念秋季企画展 くにとち発掘—最近の発掘調査から—』、三四—三七頁、くにとち郷土文化館

和田哲二〇一五「緑川東遺跡の敷石遺構と石棒をめぐって」『多摩考古』四五、二三—二九頁、多摩考古学研究会

和田哲二〇一六「統・多摩の敷石住居」『多摩考古』四六、一八—三四頁、多摩考古学研究会

和田 哲他 二〇一四『東京都国立市緑川東遺跡―第二七  
地点―介護老人保健施設国立あおやぎ苑増築工事に伴う埋  
藏文化財発掘調査報告書』医療法人社団 国立あおやぎ  
会・株式会社ダイサン